

1. 分析対象と関心の所在

分析対象は、(1)：事態を“列挙”する終助詞「～わ～わ」、(2)：“限定”を表すとりたて助詞「ばかり」、(3)：“傾向”を表す接尾辞「～がち」の3つの形式である。

- (1) とくに戦後、食べ物がどんどん変わってきました。その結果、病気は増えるわ、犯罪は増えるわで。何かおかしいんじゃないかと思うんです。(BCCWJ_PM31_00108)
- (2) いつも泣いてばかりです。どうしてこんなに弱いのでしょうか。(BCCWJ_OY04_08731)
- (3) だれしも仕事が面白いとか忙しさに追われているときは、つい仕事優先になり、自分の健康への配慮がおろそかになりがちです。(BCCWJ_LBa3_00021)

この3形式は表面的な意味・機能範疇や形態・統語範疇はそれぞれ全く異なるが、否定的な評価の意味を伴いやすいという特徴を共有する。肯定的な評価が全く不可能というわけではないが、以下のような肯定的評価を述べる文では不自然になりやすい。

- (4) ?その結果、病気は減るわ、犯罪は減るわで。良い変化がたくさんありました。
- (5) ?いつも笑ってばかりです。どうしてこんなに毎日楽しいのでしょうか。
- (6) ?時間に余裕があるときは自分の健康への配慮が行き届くようになりがちです。

本発表は、これまでは併せて分析されることのなかったこれら3形式が共有する特徴を指摘し、個々の形式の分析からは見えてこない、評価的意味の認知的基盤と構文的基盤について検討する。

2. 評価的意味の認知的基盤

研究が最も進んでいる「ばかり」の記述を足がかりにして、3形式にいずれも「反復的観察」という心内行動が関与していることを指摘する。

2.1 「ばかり」

「ばかり」は、「だけ」や「しか」と同じ“限定”を表すとりたて助詞として位置づけられることが多いが、対象が複数でなければならない(7)、他の対象を厳密には排除しない(8)など、「だけ」「しか」にはないふるまいを見せることもよく知られている。

- (7) a. 太郎だけが時間通りに来た。／太郎しか時間通りに来なかった。
b. ??太郎ばかりが時間通りに来た。
- (8) a. この一週間そばだけ食べたよ。／この一週間そばしか食べなかったよ。
b. この一週間そばばかり食べたよ。(菊地 1983: 58-59、「しか」の例は発表者が追加)

このような事実から、「ばかり」は、“限定”というよりも、話者が対象を何度も観察したことを表すという趣旨の指摘がさまざまな研究でなされている(点線下線はいずれも発表者による)。

- (9) a. 複数回、話し手はある現象を観察し、主観的に「多い」と判断した時に、「ばかり」を使用してその現象を叙述している (澤田 2007: 131)
- b. 〈同類として括れる事態が数多くみとめられる〉時に使われる (菊地 1983: 57)
- c. 〈ある前提にあてはまる要素が、ある基準上の如何なる角度から判断しても、バカリによって示される当該要素である〉ことを、発話者が確認したことを表明する (安部 2001: 139)
- d. 「ばかり」の探索領域は、事物を探索領域とする探索の集合である (定延 2001: 128)

本発表ではこの心内行動を「反復的観察」と呼んでおく。先行研究の記述において重要なのは、複数なのは対象ではなく、事態を観察する認知主体の行動の方だという点である。このことは、「四方は海ばかり」のような対象(「海」)は1つでしかあり得ない場合でも、「ばかり」を用いることができることからわかる(cf. 定延 2001)。つまり、「四方は海ばかり」は、「北を見ても海、東を見ても海、南を見ても…」という認知主体の観察行動が複数回なされているため、「ばかり」が現れているのである。

以下では、この「反復的観察」という心内行動が「～わ～わ」「～がち」にも関与していることを見る。「反復的観察」の指標となる文法現象としては、以下の3つが挙げられる。【1】は瞬間的かつ1回的事態は反復的に観察することができないこと、【2】自分自身は観察の対象にしにくいこと、【3】は観察の対象にそぐわない事態であることを反映したふるまいである。

【1】近接未来を表すル形の現象描写文には現れにくい

(10) ??あつ、赤い鳥ばかりが飛ぶ! (cf. 「だけ・しか」)

【2】話者自身の意志的行為を述べる文には現れにくい

(11) ??私ばかりリーさんを当てる。/ ??私ばかりリーさんをジョギングさせる。(cf. 「だけ・しか」)
(澤田 2007: 127)

【3】出来事の真理や規則性を述べる文には現れにくい

(12) ??太陽は東ばかりからのぼる。(cf. 「だけ・しか」)

2.2 「～わ～わ」

「～わ～わ」が表すのも事態の反復ではなく、観察の反復であることは先行研究ですでに指摘されており、本発表もこの分析を踏襲する。

(13) (「あるわあるわ、大判小判がざっくざく」の例について)「ある」ということを何度も認知しなおした、というところから、ある種の強調という意味になっている。

(森山 1995:128 括弧内の補足、点線下線は発表者による)

(14) ① 同一動詞の繰り返しにより、話者が眼前の事態Vを繰り返し認知したことをあらわす。

② 事態Vの認知の繰り返しに伴う程度・量の甚だしさに対する話者の驚きを聞き手に伝える。

(野呂 2018: 197 点線下線は発表者による)

また、それを反映した【2】のふるまいについてもすでに指摘がある。

(15) ? (私は) 飲むわ飲むわ、一升瓶を空けてしまった。(野呂 2013:49)

なお、以下の例のように、過去を回想する語りでは、話者自身の意志的行為を述べる文にも「～わ～わ」

が現れるが、これは現在の自分と切り離れた存在として過去の自分の行動を改めて観察して述べているためだと考えられる。

- (16) a. 大学の四年間、酒は飲むわ麻雀は打ちまくるわ、男出入りはするわで、親たちの私への信用は相当うすらいでいたにちがいない。(BCCWJ_LBd9_00141)
- b. 飛行機がこなくなつて、それでバスで強行してフェリーには割りこむわ、汽車には飛び乗るわ。その結果、千キロメートル以上もバスで移動するはめになつてしまった。ほんとうにバスに乗りづめでしたね。(BCCWJ_LBd7_00001)

過去の回想に現れる自己は他者と同様に扱えるというのは以下のような例からも窺える。

- (17) a. 私は {?さっきまで/3年前は} 田中さんに会いたかつた {ようだ/はずだ}。
b. 佐藤さんは {さっきまで/3年前は} 田中さんに会いたかつた {ようだ/はずだ}。

【1】【3】に関しても「～わ～わ」は「ばかり」と同様のふるまいを見せる。

- (18) a.??あつ、子供が泣くわ泣くわ。
b.??あつ、客が来るわ子供が泣くわ。(cf. 「～し(～し)」)
- (19) a.??2×12 も 3×8 も 4×6 も、24 になるわなるわ。(cf. 「～し(～し)」)
b.??太陽は西に沈むわ、月は東から出るわ。(cf. 「～し(～し)」)

2.3 「～がち」

「～がち」は、井上(1998)や島岡(1998)によって、事態が頻繁に生起するという傾向を表す形式と記述されてきた。しかし「～がち」も、「ばかり」と同様、事態そのものが反復的に生じていると考えると都合が悪い例が見つかる。例えば、(20)は「皮がたるんでいない状態からたるんでいる状態への変化が複数回生じる」「黙っていない状態から黙っている状態への変化が何度も生じる」という事態の生起頻度の多さを述べているわけではない。「皮がたるんでいるという状態/黙っているという状態が複数回観察される」ということを表していると考えた方がよい。

- (20) a. 若作りだけど確実に筋肉が減少して皮がたるみがちになっています。(BCCWJ_OY05_03663)
b. はためく幌を雨が千指ではじく。吠えるように話さなければならないので、つい黙りがちになる。(BCCWJ_OB2X_00207)

このような事実から、大江(2013)では「～がち」を(21)のように記述した。「事態の存在の数え上げ」が、本発表で言う「事態の反復的観察」に相当する。

- (21) 事態の存在の数え上げによって導き出される傾向を表す(大江2013:31)

【1】ル形の近接未来を表す現象描写文に現れないことは、「～がち」が“傾向”を表す形式であるため不自然になることに議論の余地はないため、【2】【3】について検討する。【2】については、(22)に示す通りである。

- (22) a. {?私/若者} はコンビニを利用しがちだ。(cf. 「～ことが多い」)
b. {?私/田中さん} は学校をサボりがちだ。(cf. 「～ことが多い」)
cf. 私はついつい {コンビニを利用し/学校をサボっ} てしまいがちだ。

【3】に関しても同様である。“傾向”を表す「～がち」は「出来事の真理や規則性を述べる」文をつくる形式のように思えるが、「～がち」が表しうる“傾向”は(23)のような話者が反復的に観察している対象として自然な事態に限られ、(24)のような話者が反復的に観察するような身近な事態でない場合には不自然になりやすい (cf. 「～ことが多い」)。

- (23) a. 昼食の後は睡魔に襲われがちだ。
b. 夏場は食欲が落ちがちだ。(大江 2013: 30)
- (24) a. ?山の奥地ではクマに襲われがちだ。
b. ?隕石は地球の極点に落ちがちだ。(大江 2013: 30)

2 節のまとめ

「～わ～わ」「ばかり」「～がち」には、“列挙”“限定”“傾向”という表面的意味からは予測されない、共通の文法的ふるまい(【1】【2】【3】)の存在が指摘でき、これらの形式はいずれも「反復的观察」という心内行動が関与している形式と見ることができる。いずれも評価的意味が生じやすい形式であることから、「反復的观察」という心内行動が評価的意味の認知的基盤になっていることが示唆される。

3. 評価的意味の構文的基盤

3形式はいずれも否定的評価を伴いやすいが、構文のあり方によって評価的意味のあり方が異なる。

3.1 「～わ～わ」

「～わ～わ」は「～」部分に同一事態が現れる場合(「XわXわ」と異なる事態が現れる場合(「XわYわ」)があるが、「XわYわ」の方が「XわXわ」よりも節サイズが大ききようである。「XわYわ」の節内には否定形、テイル形、主題、名詞述語が生じうるが、「XわXわ」には生起しない。

- (25) a. 以前十八インチの5段ギヤ車を使っていましたが、スピードは出ないわ安定しにくいわ、また変速しても差が出にくかったです。(BCCWJ_OC06_03493)
- b. 子どもたちを起こさなくちゃと時計をにらみ、「起きなさい、遅れるよー」と叫び、気がつけば目玉焼きは焦げているわ、魚は焦げているわ…。(BCCWJ_PB45_00287)
- c. 折りしも北海道へ上陸したとたんに道内はドカ雪の嵐。空港は閉鎖になるわ高速道路は通行止めだわでヤバイモードぷんぷん。(BCCWJ_OY03_08034)
- (26) a. ?スピードが出ないわ出ないわ。
b. ?魚が焦げているわ焦げているわ。
c. ?高速道路が通行止めだわ通行止めだわ。
d. ?子供は泣くわ泣くわ。

興味深いのは、構文の違いと評価的意味の間に関連性が見出される点である。「XわXわ」は反復的に観察される事態をそのまま描写することによる驚きの感情がよみとれば良いが、「XわYわ」は単なる事態の描写から一歩踏み込んで何らかの評価的な態度が示されていないと不自然になる。

- (27) a. そう思い当たり改めて冷蔵庫のなかを見てみると、あるわあるわ、ビールやワイン、ジャンパンがいっぱい。(BCCWJ_LBt9_00054)
- b. 世の中には《グレイテスト・ヒッツ》という名のベスト・アルバムは非常に多い。試しにアマゾン・ジャパンのサイトで《グレイテスト・ヒッツ》を検索すると出るわ出るわ七百一件！(BCCWJ_PB57_00010)
- (28) a. 冷蔵庫のなかを見てみると、ビールがあるわワインがあるわ、{?いっぱいだった／酒だけだった}。
- b. 検索すると 90年代の古いアルバムが出るわ、最近のアルバムも出てくるわ {?七百一件！／数えるのも嫌になるほどだった}。

同じ「～わ～わ」でも、「XわXわ」よりも節サイズが大きい(節の従属度が低い)「XわYわ」の方が評価的意味を伴う傾向がある。

3.2 「ばかり」

「ばかり」も否定的評価の意味を伴いやすいことが指摘されている(澤田 2007, 中俣 2010)。客観的には同様の事態を表す「だけ」文と「ばかり」文を比べたとき、相対的に「ばかり」を用いた文の方が、その事態を肯定的に評価しているという解釈がしにくい(大江 2015)。

(29) a. 太郎は夏休み中、ずっと論文だけ(を)読んでいた。素晴らしい学生だ。

b. ?太郎は夏休み中、ずっと論文ばかり(を)読んでいた。素晴らしい学生だ。

ただし、否定的な評価しか表さないかというそうではなく、肯定的な評価を表すことも可能である。

(30) a. 太郎は夏休み中、ずっと論文ばかり(を)読んでいたおかげで、研究が大いに進んだ。(素晴らしい学生だ。)

b. 太郎には最近良いことばかりが起こっている。

注目されるのは、「ばかり」が述語に付加すると否定的評価が義務的になり、肯定的評価が困難になることである。

(31) a. ?太郎は夏休み中、ずっと論文を読んでばかりいたおかげで、研究が大いに進んだ。(素晴らしい学生だ。)

b. ?最近の良いことが起こってばかりいる。

c. ?この街の治安は良くなるばかりだ。

述語付加で否定的評価から解放されるのは、アスペクトを表すような慣用的な用法のみである。

(32) a. 所員の意見はほぼ一致しており、後は所長の判断を待つばかりです。

b. その男とはつい先日会ったばかりだ。(沼田 2009: 204)

同じ「ばかり」でも、名詞付加よりも述語付加の方が否定的評価を伴う傾向がある。

3.3 「～がち」

述語に接続する形式である「～がち」は、常に否定的評価を伴う。

(33) ?こういう時は良いことが起こりがちだ。

「～がち」が否定的評価から解放されるのは、(34)のような名詞と接続する慣用的な例のみである。

(34) 「黒目がちな人」「山がちな地形」「伏し目がちに話す」「遠慮がちに言う」

述語接続の「～がち」は常に否定的評価を伴う。

3 節のまとめ

「～わ～わ」「ばかり」「～がち」という同一形式内でも評価的意味の表れ方は一様ではない。大まかには文の構造上外側に位置する方が特定の評価的意味と結びつきやすい傾向がある。

4. まとめ

「～わ～わ」「ばかり」「～がち」それぞれの形式に関する記述を踏襲しつつ、「反復的観察」という心内行動の指標となる文法現象を整理して共通の道具立てを使って併せて分析したことで、心内行動と評価的意味の関わりを検討する段階に踏み込めた。今後、同様のふるまいを見せる他形式と評価的意味との結びつきを観察していくことで、「反復的観察」という心内行動が評価的意味の認知的基盤になっている」という仮説の確からしさを検証していきたい。

また、同一形式でも構文環境によって評価的意味の表れ方やその内実もさまざまである一方、大まかな傾向性が見てとれる部分もある。評価的意味の「場合分け」（感情的意味か評価的意味か、肯定的評価か否定的評価か）と構文環境の「場合分け」をした上で、評価的意味が生じる現象を構文論的にも検討していく必要がある。

引用文献 ■ 安部朋世(2000)「バカリによる「限定」」『和光大学表現学部紀要』1/ ■ 井上次夫(1998)「傾向を表す表現について—～がちだ・～ぎみだ・～やすい—」『奈良教育大学国文』21/ ■ 大江元貴(2013)「「-がちだ」の認知論的・語用論的分析：「-やすい」との比較から」『KLS』33/ ■ 大江元貴(2015)「限定のとりたて詞文に生じる評価的解釈—とりたて詞の付加位置と語用論のプロセスに注目した分析—」『筑波応用言語学研究』22/ ■ 菊地康人(1983)「バカリ・ダケ」国広哲弥（編）『意味分析』/ ■ 定延利之(2001)「探索と現代日本語の「だけ」「しか」「ばかり」」『日本語文法』1(1)/ ■ 澤田美恵子(2007)『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版/ ■ 島岡紀子(1998)「難易文と「-がちだ」文」『筑波応用言語学研究』5/ ■ 中俣尚己(2010)「「そんな」や「なんか」はなぜ低評価に偏るか?—経験基盤的ヒエラルキー構造からの説明—」『日本認知言語学会論文集』10/ ■ 沼田善子(2009)『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房/ ■ 野呂健一(2013)「「～わ～わ」構文の分析」『日本語文法』13(1)/ ■ 野呂健一(2016)『現代日本語の反復構文』くろしお出版/ ■ 森山卓郎(1995)「並列述語構文考—「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって—」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』くろしお出版

コーパス ■ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)』国立国語研究所